九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

”Tradition and the Individual Talent”についての一考察 : エリオット家とのかかわり

古賀, 元章
福岡教育大学 : 教授

https://doi.org/10.15017/1456053

出版情報：Comparatio. 17, pp.21-31, 2013-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会
バージョン：
権利関係：

"Tradition and the Individual Talent" についての一考察
—エリオット家とのかかわり—

古賀元章

はじめに

1914年、T. S. Eliot（1888－1965）は興味を抱く哲学を研究する目的で海外留学先のイギリスにやって来る。その頃、関心がある詩作は筆が振るわなかった。彼がその枯渇状態を抜け出すことができたのは、同年に当地でアメリカ人の詩人、批評家の Ezra Pound（1885－1972）に出会って、文学に対する彼の飽くなき情熱を肌で感じてからである。

エリオットが詩作する活動を再開するのと連動して、評論を行う活動も活発となる。そうした評論の中で代表的なものが、1919年の "Tradition and the Individual Talent" である。この評論を検討するとき、上述したパウンドの影響を軽視できなであろう。

エリオットは、社会活動に奉仕して後世に名を残すほど著名な祖父の William Greenleaf Eliot（1811－87）がエリオット家の中心人物であることを意識しなければならない躾を両親—父親の Henry Ware Eliot, Sr.（1843－1919）、母親の Charlotte Champe Eliot（1843－1929）—から受けている。この事実に注目すると、1919 年の評論は、彼がエリオット家とのかかわりを自覚しながら脱稿したことを示唆する。

このような考察に注意を払って、本稿は、"Tradition and the Individual Talent" がパウンドに対するエリオットの影響を反映させながら、その背後にエリオットの実家とのかかわりも書き記していることを論じたい。

1

"Tradition and the Individual Talent" の中で、"what happens when a new work of art is created is something that happens simultaneously to all the works of art which preceded it."（49-50）の後に続けて、エリオットは次のように主張する。

> The existing monuments form an ideal order among themselves, which is modified by the introduction of the new (the really new) work of art among them. The existing order is complete before the new work arrives; for order to persist after the supervention of novelty, the *whole* existing order must be, if ever so slightly, altered; and so the relations, proportions, values of each work of art toward the whole are readjusted; and this is conformity between the old and the new. Whoever has approved this idea of order, of the form of European, of English literature will not find it preposterous that the past should be altered by the present as much as the

present is directed by the past. And the poet who is aware of this will be aware of great difficulties and responsibilities. (50)

上の引用文の前半で力説されているのは、新しい文学作品と既存の文学作品との間に調和のある関係が存在することである。その関係が保たれるため、既存の文学作品で構成される全体が新しい文学作品を受け入れるという柔軟な仕組みを有する必要が求められる。6 行目の "Whoever" 以下の文章の内容が表すのは、既存の文学作品を生み出しているヨーロッパ文学（英文学を含む）という全体である。エリオットは、"the present is directed by the past" と述べて、既存の文学作品に敬意を払いながら、"the past should be altered by the present" と強調する。この強調は、イギリスで新参者の彼の文学作品が価値あるものとして人々から認められるべきであることを遠回しに示唆する。この示唆は、"The poet must be very conscious of the main current, which does not at all flow invariably through the most distinguished reputations." ("Tradition and the Individual Talent" 51) から読み取れるであろう。

こうした論考が可能となる背景を検討してみよう。1914 年、博士課程に在籍中のエリオットはハーバードからシェルドン在外研究奨学金（Sheldon Traveling Fellowship）を獲得する。その目的は、イギリスの観念論哲学者の F. H. Bradley（1846－1924）を研究するため、彼の弟子で、同国の観念論哲学者の Harold Joachim（1868－1938）の指導を受けることである。それは、今後の進むべき道を見出すための海外留学である。オックスフォード大学のマートン・カレッジ（Merton College）へ入学する前の同年 9 月 22 日、彼は大学時代からの友人で詩人の Conrad Aiken（1889－1973）の紹介で、ロンドンを拠点にして文学の改革運動を推進していたパウンドのアパートを訪れる。それ以来、彼は文学に対する彼の熱意にに心を奪われる（"Ezra Pound" 327)。パウンドの影響を受けて、彼はイギリスにそのまま住んで詩作に専念する気になる（"To James Houghton Woods," 10 July 1915, *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1*: 117)。

エリオットの 1918 年の "A Note on Ezra Pound" では、彼のパウンド観を伝える文章が書き綴られている。たとえば、"What has mattered is not simply that he by insight and labour got the spirit of Provençal, or of Chinese, or of Anglo-Saxon, as the case of may be; but he has made masterpieces, some of translation, some of re-creation, by his perception of the relation of these periods and languages to the present, of what *they* have *we* want; and this perception of relation involves an organized view of the whole course of European poetry from Homer." (4-5) である。"an organized view" が、1919 年の "Tradition and the Individual Talent" から引用した先の文章で "the relations, proportions values of each work of art toward the whole" に反映されているであろう。また、"the whole course of European poetry from Homer" が、同じ 1919 年の評論で歴史的な過去に言及した "the whole of the literature of Europe from Homer" (49) に反映されているであろう。

エリオットは両親から物事の善悪を厳しく教えられて育てられている（"American Literature and the American Language" 44; Levy and Scherle 121）。エリオット家の教育の支えとなっているのは、同家を墓場から支配していた息子の祖父が社会の発展のため生前に全身全霊で行ったことである。それは、公共への義務、慈善、立派な仕事であり（Pritchett 73）、エリオット家の遺訓といっても過言ではないであろう。エリオットの今回の海外留学は、哲学の研究が目的であった。哲学の研究は、両親が望んだもので（Ackroyd 65）、彼らから反対されないからである（Ackroyd 54）。"Tradition and the Individual Talent" を脱稿していた頃、エリオットはアメリカの弁護士である John Quinn（1870－1924）に宛てた 1919 年 1 月 6 日付の手紙の中で、両親の存在を視野に入れながら、エリオットは一冊の本を急いで出版する私的な理由を述べている。その理由は、要約すれば、イギリスに移り住んで文学に従事することが人生の台無しではないと彼らに認めさせることである（*The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1*: 315）。ところが、父親が上の手紙の日付の翌日に死去する。それを知って深く悲しんだが、気を取り直して、エリオットは 1919 年 1 月 26 日に再びクィンに手紙を書き送って、父親が亡くなっても母親がまだ健在なので、あくまでも一冊の本の出版を希望している（*The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1*: 319）。

エリオット家の躾や上の二通の手紙の内容から判断して、エリオットはエリオット家を強く意識して、1919 年の評論を書き上げている。そうすると、彼が詩人のあり方を力説するのは、パウンドの影響ばかりではなく、母親に自らの人生の正しさを立証したいからであると言える。

"Tradition and the Individual Talent" の中で、伝統あるヨーロッパ文学全体に名を連ねるため、詩を書く者にとって「歴史的感覚」（"the historical sense"）の必要性が唱えられている。この感覚は、エリオットによれば、"a perception, not only of the pastness of the past, but of its presence"（49）である。彼のパウンド観には、過去と現在の密接な関係が示唆されていた。この示唆を推し進めた結果、過去の過去性（過ぎてしまったこと）と過去の現在性（過去が現に存在すること）に気づくのが、「歴史的感覚」である。そこには、彼が両親から受けた家庭教育の影響もうかがわれる。それは、両親が息子に、祖父の偉業（過去の過去性）を伝えること（過去の現在性）である。

2

エリオットは、詩と詩人の両方の存在価値に目を向けて次のように発言する。

> Honest criticism and sensitive appreciation is directed not upon the poet but upon the poetry.... In the last article I tried to point out the importance of the relation of the poem to other poems by other authors, and suggested the conception of poetry as a living whole of all the poetry that has ever been written. The other aspect of this Impersonal theory of poetry is the relation of the poem to its author. ("Tradition and

the Individual Talent" 53)

正しく批評したり敏感に鑑賞したりする働きに注意を払って、彼は詩人よりも詩そのものを重視する「非個性的詩論」("Impersonal theory of poetry") を提唱する。この詩論について二つの用途が示されている。一つは、全体（エリオットの場合、ヨーロッパで今までに書かれた詩の集合体）を考慮に入れて、ある詩を別の詩と比較して評価することである。この評価には、ホーマー以来のヨーロッパ文学の中で過去の作品と現在の作品との密接なかかわりに注目するエリオットのパウンド観が反映されている。この評価にはまた、祖父の過去の偉業とその伝承を両親から意識させられた彼の個人的な感情も投影されている。

もう一つは詩とその作者との関係である。"the more perfect the artist, the more completely separate in him will be the man who suffers and the mind which creates; ..." ("Tradition and the Individual Talent" 54) と書かれているように、正当に評価されるため、詩は、彼にとって、その作者と切り離されるべきなのである。この見方は、人生上の様々な経験をする人間をできるだけ遠ざけようとする態度が見られる。こうした態度は、文学に情熱的に取り組むパウンドの姿を踏まえているばかりではなく、エリオット家（とりわけ母親）から現在の自らの人生（イギリスに定住して文学に従事）を非難されるのを避けるためでもあると言えよう。

後にエリオットは、詩人が作品をどのように書くべきかを論じている。たとえば、彼の詩作論が次のように述べられている。

> It is not in his personal emotions, the emotions provoked by particular events in his life, that the poet is not in any way remarkable or interesting.... The business of the poet is not to find new emotions, but to use the ordinary ones and, in working them up into poetry, to express feelings which are not in actual emitions at all. And emotions which he has never experienced will serve his turn as well as those familiar to him. (57-58)

詩人が人々に注目されたり興味を抱かせたりするのは、詩人の個人的な情緒、つまり実生活の特別な出来事により呼び起こされる情緒のためではなく、詩人が日常のありふれた情緒を詩の中で表現する工夫をするためであるという。こうした詩作論は、詩の内容を豊かにする可能性を秘めている。

上の文章に続けて、次のような彼の詩作論が展開される。

> Consequently, we must believe that "emotion recollected in tranquillity" is an inexact formula. For it is neither emotion, nor recollection, nor, without distortion of meaning, tranquillity. For it is neither emotion, nor recollection, nor, without

distortion of meaning, tranquillity. It is a concentration, and a new thing resulting from the concentration, of a very great number of experiences which to the practical and active person would not seem to be experiences at all; it is a concentration which does not happen consciously or of deliberation. These experiences are not "recollected," and they finally unite in an atmosphere which is "tranquil" only in that it is a passive attending upon the event. (58)

エリオットは、イギリスの代表的なロマン派詩人である William Wordsworth (1770－1850) の語句の "emotion recollected in tranquillity" ("Preface to *Lyrical Ballads* (1802)") (611) を非難の対象にして、詩の内容がそのまま詩人の経験を反映することに反対する。彼が目指すのは、詩人は一種の集中から得られる題材を、直接に表現せずに、詩の表現として工夫することである。そこには、詩の中で田舎や自然の美しさを自ら謳歌するワーズワスの姿勢を強く打ち消する彼の気持ちが反映されている。

エリオット家の中心人物として君臨していた祖父は、沈着な思考を信仰の土台としている (*Discourses on the Doctrines of Christianity* 129)。同家のモットーは黙して行動することであった (Charlotte Champe Eliot 358; Drew 165n)。そこで真摯な祖父の生き方が、このモットーに反映し、両親の口からエリオットに伝えられたと思われる。同家のモットーは、心の静寂を重んじるという点で、先のワーズワスの語句と似通っている。エリオットは、両親から祖父の信奉するユニテリアン派[1]を行動の規範として強要される家庭環境が重圧となる (Powel 4)。そのことが、この詩人の語句を批判する心情に投影されているであろう。

「非個性的詩論」の用途 (詩とその作者との関係) について、エリオットは "It is in this depersonalization that art may be said to approach to the condition of science." (53) と書いている。この文章の内容を説明するため、彼は酸素と二酸化硫黄がはいった容器に細い一片の白金を入れたときの化学反応に言及する。その化学反応の結果から亜硫酸ができるが、そこには、亜硫酸と白金がお互いに影響を受けた痕跡が見当たらない (53-54)。詩人の精神の働きは、ここでの白金のような働きに似ていることが論じられる。詩人の精神は、多くの感情と語句とイメージを入れる容器にたとえられる。この容器の中で、分子が結び付いて新しい化合物が生まれる。詩人の精神の働きは、これらの感情と語句とイメージを巧みに組み合わせて斬新な詩的表現や詩作品を生み出すが、白金のようにその跡形を残さないのである。

3

このように、詩人について科学的な発想をするエリオットの姿[2]を探究するため、1918年の "Contemporanea" に見られる次のような文章に注目したい。

A poet, like a scientist, is contributing toward the organic development of culture: it is just as absurd for him not to know the work of his predecessors or of men writing

in other languages as it would be for a biologist to be ignorant of Mendel or De Vries. It is exactly as wasteful for a poet to do what has been done already, as for a biologist to rediscover Mendel's discoveries.... To remain with Wordsworth is equivalent to ignoring the whole of science subsequent to Eramus Darwin. (84)

優秀な科学者は自分の仕事に我を忘れるほど没頭する。その光景から言えるのは、科学者の個性は消えたのではなく仕事に向けられるが、科学者が存在しなければその仕事が生まれない。こうした科学者の姿が詩人の創作活動にも当てはまることが指摘されている（Modern Tendencies in Poetry 10-11）。この考えが "A poet, like a scientist" に反映されている。エリオットは、亜硫酸の生産量が国の物質文明の尺度であると述べる（Modern Tendencies in Poetry 11）。この生産量は、様々な要素（感情、語句、イメージ）を巧みに活用する詩人の精神の積極的な働きぶりに呼応する。この詩人の活発な創作活動が、文学を興隆して、文明や文化の繁栄へとつながることを示唆する。このような示唆が、"A poet, like a scientist, is contributing toward the organic development of culture" に盛り込まれているであろう。上の文章で言及される三人は、オーストリアの司祭、植物学者の Gregor Johann Mendel（1822－84）、オランダの植物学者の Hugo de Vries（1848－1935）、イギリスの博物学者、医師、詩人の Erasmus Darwin（1731－1802）である。彼らから思い起こされるのは、メンデルの〈メンデルの法則〉[3]、ド・フリースのこの法則の再発見[4]、ダーウインの先駆的な進化論[5]である。彼らはこれまでの通常の考えを覆し、それぞれの分野で画期的な仕事をしている。周知の科学の出来事を引き合いに出して、エリオットは詩が発展するため既存の詩の考え方に反対する。その考え方の代表として、ワーズワスが持ち出される。このことが、"emotion recollected in tranquillity" に触れたエリオットの発言の背景にあると思われる。

エリオットは 1918 年の "Studies in Contemporary Criticism" の中で、メンデルに言及した文章を次のように書いている。

Criticism, like creative art, is in various ways less developed than scientific research. For one thing, scientific progress, in Europe and America, would not have reached its present stage had it not been pretty thoroughly internationalized: if the results of any important experiment in one country were not immediately taken up, tested and proceeded upon in every other. A vast improvement in this respect had taken place, for instance, since Mendel's time. Of course, science, as well as literature, is dependent upon the occasional appearance of a man of genius who discovers a new method. But there is much useful work done in science by men who are only clever enough and well enough educated to apply a method; and in literature there *ought* to be a place for persons of equivalent capacity. (113)

エリオットは詳しく述べていないが、メンデルの偉業の再評価をきっかけにして、遺伝学が急速に発展する。たとえば、ドイツの生物学者の August Weismann（1834－1914）の生殖質連続と自然淘汰万能の思想や、アメリカの動物学者、遺伝学者の Thomas Hunt Morgan（1886－1945）の要素主義的な機械論の遺伝子説が現れて、メンデルの偉業が研究者たちの間で広く認められるようになる（『哲学事典』 1387-88）。遺伝学のように、科学の分野で才気に富んで十分に教養のある人々が多くの有益な仕事をしていることを例に挙げて、エリオットは文学の分野でも才能のある人々が活躍できるべき場が存在すべきであると主張する。この主張は、批評や芸術の分野で発展の余地があることを裏付けるようとする試みであるばかりではなく、アメリカからイギリスへ来た新参者の自分がそうした分野で有能な人物であることを暗にアピールする論調となっている。

遺伝学の発達に着目するエリオットは、1918 年の "Recent British Periodical Literature in Ethics" の中で、次のような文章を書き留めている。

> Professor MacBride draws two conclusions of social importance: 1. That in former times the struggle for existence was enough to keep down the defective element in the population; but under present conditions these people are protected and multiply. He advocates therefore segregation and sterilization for the benefit of society. 2. The transmissibility of acquired characters makes the problem of education of the highest importance: we must adopt such a system of education that "the next generation may start at a very slightly higher level of capacity than their father's."[6] (274)

マクブライド教授の社会的に重要な結論が述べられている。それは、①社会のため、保護され増え続けている欠陥のある人々を隔離し断絶すること、②次世代が親の代よりも高いレベルの能力でスタートできる教育制度を採用すること、である。

エリオットは同じ 1918 年の評論の中で、マクブライド教授の "Back to Lamarck" からの文章を引用して次のように指摘する。

> And in reference to the two conclusions mentioned above, he says that while racial improvement by any means must be a very slow process, the harm done by the propagation of the defective is very quickly felt. Furthermore, he insists upon the importance of the responsibility of parents: "there is no system of state subventions," he says very justly, "which will not break down if parental responsibility be removed and reckless reproduction encouraged." (274; "Back to Lamarck" 565)

前述の結論に関連したマクブライド教授の考えが論じられている。その要点は、③人類の進

歩は非常に緩やかであるが、欠陥のある人々の増大による害は速く感じられること、④親の責任が重視されないと、彼らの人口が多くなること、である。

上述の4点（①～④）に注意を払うエリオットの論述は、彼の優生思想に基づいているように思われる。そこで、彼が優生思想を抱いた背景を考えてみたい。

エリオットは、1914年にハーバードから奨学金を得て渡英し、そのまま定住する。イギリスの数学者、哲学者の Bertrand Russell（1872－1970）は、ハーバード大学大学院でのかつての教え子である彼を、メンデルの遺伝説に基づいて活動する優生教育協会（Eugenic Education Society）のメンバーである Lady Ottoline Morell（1873－1938）に紹介している（Leon 170）。この協会の目的は、「優生学の国家的重要性を広く認めさせ、この理想にのっとった親の責任を確立すること、人種の効果的改善を念頭においた遺伝法則の知識を広めること、家庭・学校その他の場での優生学の啓蒙を行うことであった」（米本他 24）。こうしたラッセルの紹介を通して、エリオットは優生学や優生教育協会の目的を認識したと思われる。その認識の土壌は彼の母親の家庭教育に見出される。1907年にイギリスで設立された優生教育協会は、彼女が住むセントルイスでも組織されている（Cuddy 51）。この協会の目的に共鳴して、彼女は各方面で広く社会活動を行っている。[7] 彼女の優生思想は、息子と病弱なイギリス人の Vivienne Haigh Wood（1888－1947）との結婚に反対したこと（Cuddy 52）、母国での息子の学究生活を望んだこと（"Charlotte Champe Eliot to Bertrand Russell," 23 May 1916, *The Letters of T. S. Eliot, Vol. I*: 153）にうかがわれる。

エリオット家の教育の土台は、既述したように、祖父（彼女の義父）の遺訓（公共への義務、慈善、立派な仕事）である。エリオットは、この遺訓を忠実に実行する母親から育てられている。彼女の優生思想と義父の遺訓は、社会の進歩を目指すという点で一致している。そこで、母親の優生思想は、家庭教育を通して、息子に受け継がれたと言ってよいであろう。

このような背景に基づくと、エリオットの優生思想は母親の影響を受けているのがわかる。そのことは、一連の1918年の評論ばかりではなく、翌年の評論にも認められるように思われる。

"Tradition and the Individual Talent" は、既存の文学作品に取って代わって、新しい文学作品の出現を求める。既存の文学作品の一例として見られるワーズワス的な詩（詩人の個性を投影して、静寂のときに表現する情緒）を批判して、彼は自説の「非個性的詩論」を提示する。そこには、ワーズワス的な詩（悪い遺伝に相当）を脱却して、自説の詩作論に基づく詩（よい遺伝に相当）を現在に生かそうとする彼の優生思想が読み取れるであろう。

この評論は次のような文章で終わる。

> The emotion of art is impersonal. And the poet cannot reach this impersonality without surrendering himself wholly to the work to be done. And he is not likely to know what is to be done unless he lives in what is not merely the present, but the present moment of the past, unless he is conscious, not of what is dead, but of what is

already living. (59)

これまで述べられたことが評論の結論としてまとめられている。詩のような芸術の存在価値は、詩人の個性ではなく、詩それ自体である。したがって詩人は、自分の作品の完成に全身全霊を傾けなければならない。その際の詩人は、現在と過去（ホメロス以来のヨーロッパ文学）を共に視野に入れなければなければならない。こうした姿勢は、エリオットが目撃したパウンドの姿に感銘した気持ちに基づいている。こうした姿勢はまた、エリオット家を強く意識する彼の姿を思い起こさせる。同家の中心人物は、生前中に偉業を成し遂げた祖父である。エリオットは、まるで祖父が生きているかのように両親から育てられている。祖父の教えに依拠した同家のため、家族の者は生きていかなければならない。エリオットは、その一人で、自由奔放を戒め、格式ある同家の現在と過去を同時に認識しなければならいない。そうした彼の私的な感情も見過ごせないであろう。

おわりに

以上の考察から、"Tradition and the Individual Talent" で提唱されているエリオットの「非個性的詩論」は、われわれ読者が詩人の個性よりも詩そのものに着目すべきであることを主張する。その主張を踏まえて、詩人は感情を自発的に発露させるのではなく、様々な素材を創意工夫して作品を完成させなければならない。一方で、この詩論はわれわれから詮索されることなく、詩人の個人的な感情を表すことができる。その意味で、エリオットの詩論は、作品を客観的に評価できるという一面と、その陰に隠れて個人的な感情を盛り込んで気分を発散させる別の一面を有している。前者から、イギリスで詩人として名を成そうとする彼の野心が読み取れるであろう。後者から、エリオット家とのかかわりを生かして自分の人生を模索しようとする彼の願いも読み取れるであろう。

1947年にマサチューセッツ州のコンコード・アカデミー（Concord Academy）で講演したとき、エリオットは詩人として自分の人生を振り返って、"real poetry comes primarily from a pressure inside us...." (*On Poetry* 10) と語る。この発言は、詩の執筆の原動力が、彼の場合、内なる重圧であることを物語っている。そうすると、彼がたえずエリオット家とかかわっているという現実こそが、自分の詩を脱稿する要因となっていると指摘できよう。

注

1. この派については、次のような解説を参照。
   「三位一体論を否定、単一人格の神を主張し、イエス・キリストの神性を認めず、その贖罪を無意味とし、聖霊を神の現存とする教派。人類愛を唱えた社会的な改革にも関心が強い。」(『岩波キリスト教辞典』1144)
2. エリオットの科学的な発想については、拙稿「T. S. エリオットの科学的思考と「非個性

的詩論」」を参考にしている点をお断りをしたい。

3. この法則については、次のような解説を参照。

「メンデルが 1865 年に発表し、近代遺伝学の基礎となった遺伝の法則。生物の形質の相違は遺伝因子によって決定され、交雑によって生じた雑種第一代には、優性形質だけが現れ劣性形質は潜在する（優性の法則）、雑種第二代には、優性形質を現すものと劣性形質を現すものが分離してくる（分離の法則）、それぞれの形質が無関係に遺伝する（独立の法則）という三つの法則がある。」（『広辞苑　第 6 版』2773）

4. この点については、次のような解説を参照。

「オオマツヨイグサの変異を調べ、メンデルの遺伝法則を再発見し（1900）、突然変異説を出して進化の要因が突然変異にありとした（1901）。」（『哲学事典』1026）

5. この点については、次のような解説を参照。

「生物の個体の発生に関しても、生き物の単位体としての生きた繊維が展開して成体になるという構図を取り、それを全生命に関して系統的にも適用したところに進化論的思想が生じた。生命の自然発生の後、獲得形質の遺伝や環境への適応を目指す内部の「要求」により体制的高次が生じ高等な生物が進化的に出現したとする。」（『岩波哲学・思想事典』1026）

6. マクブライドの "The Study of Heredity: Part IV." (355) からの引用である。

7. この点については、拙稿「T. S. エリオットのエリート論と母親の優生思想」を参照。

引用文献

Ackroyd, Peter. *T. S. Eliot: A Life.* New York: Simon and Schuster, 1984.

Cuddy, Louis A. *T. S. Eliot and the Poetics of Evolution: Sub / Versions of Classicism, Culture, and Progress.* Cranbury, NJ: Associted U Presses, 2000.

Drew, Elizabeth. *T. S. Eliot: The Design of His Poetry.* New York: Charles Scribner's Sons, 1949.

Eliot, Charlotte Champe. *William Greenleaf Eliot: Minister, Educator, Philanthropist.* Boston: Houghton, Mifflin, 1904.

Eliot, T. S. *"Recent British Periodical Literature in Ethics." International Journal of Ethics* 28.2 (Jan. 1918): 270-77.

---. "Contemporanea." *Egoist* 5.6 (June/ July 1918): 84-85.

---. "A Note on Ezra Pound." *To-day* 4.19 (Sept. 1918): 3-9.

---. "Tradition and the Individual Talent." 1919. *The Sacred Wood: Essays on Poetry and Criticism.* 1920. London: Methuen, 1928. 47-59.

---. "Ezra Pound." *Poetry* 68.6 (Sept. 1946): 326-38.

---. *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1, 1898-1922.* 1988. Ed. Valerie Eliot and Hugh

Haughton. London: Faber and Faber, 2009. 4 vols. 2009-13.

---. "Modern Tendencies in Poetry." *Shama'a* 1.1 (Apr. 1920): 9-18.

---. *On Poetry: An Address by T. S. Eliot on the Occasion of the Twenty-Fifth Anniversary of Concord Academy.* Concord, Mass: 1947.

---. "American Literature and the American Language." 1953. *To Criticize the Critic and Other Writings.* London: Faber and Faber, 1963. 43-60.

Eliot, William Greenleaf. *Discourses on the Doctrines of Christianity.* Boston: American Unitarian Association, 1886.

Leon Juan. " 'Meeting Mr. Eugenides': T. S. Eliot and Eugenic Anxiety." *Yeats Eliot Review* 9.4 (Summer-Fall 1988): 169-77.

Levy, William Turner and Victor Scherle. *Affectionately, T. S. Eliot: The Story of a Friendship, 1947-1965.* Philadelphia: Lippincott, 1968.

MacBride, E. W. "The Study of Heredity: Part IV." *Eugenics Review* 8.4 (Jan. 1917): 329-56.

---. "Back to Lamarck." *New Statesman* 8.206 (17 Mar. 1917): 565.

Powel, Harford Willing Hare, Jr. "Notes on the Life of T. S. Eliot, 1888-1910." Unpublished dissertation Brown U, 1954.

Pritchett, V. S. " 'Our Mr. Eliot' Grows Younger," *New York Times Magazine* (21 Sept. 1958): 15, 72-73.

Wordsworth, William. Preface to *Lyrical Ballads* with Pastoral and Other Poems (1802). 1802. William Wordsworth. Ed. Stephen Gill. Oxord: Oxford UP, 1984. 595-615.

大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃編. 『岩波キリスト教辞典』. 東京 : 岩波書店, 2002.

古賀元章. 「T. S. エリオットのエリート論と母親の優生思想」『比較文化研究』54 (2001): 47-55.

---. 「T. S. エリオットの科学的思考と「非個性的詩論」」『比較文化研究』58 (2002): 53-62.

新村出編. 『広辞苑 第6版』. 1955. 東京 : 岩波書店, 2008.

林達夫他監修.『哲学事典』. 1971. 東京 : 平凡社, 1993.

廣松渉・子安宣那・三島憲三・宮本久雄・佐々木力・末木文美士編. 『岩波哲学・思想事典』. 東京 : 岩波書店, 1998.

米本昌平・松原洋子・橳島次郎・市野川容孝. 『優生学と人間社会—生命科学の世界はどこへ向かうのか』. 東京 : 講談社, 2000.